



関西 ECOMAIL



第26号

関西 ECOMAIL

関西の学会員のみなさまに、ワークショップのお知らせと環境教育に関わる情報交換をしていただくために発行しています。

また、学会員以外の方々に、環境教育に関心を持っておられる方や実践をされている方とのコミュニケーションも広く図りたいと思います。

年間1000円の通信費をいただきましたら、ワークショップの案内とECOMAILを送らせていただきます。

(通信費振込先：日本環境教育学会関西支部)

郵便振替口座番号 00990-5-37886)

第42回ワークショップ案内

7月22日(土) 14:30~17:00

大阪教育大学天王寺キャンパス (JR寺田町駅下車、南出口を西へ徒歩3分)

話題提供 「環境問題に関わる今後の展開」

千葉佳一 (日本環境教育学会・日本廃棄物学会会員)

プロフィール

奈良県川西市で自宅を開放して、環境学習を定期的に関催されていた方です。現在、東京に在住されています。

第26号 目次

第40回ワークショップ(4/15)の報告 木内 功 氏	… 2~3
第6回日本環境教育学会 千葉大会 特集	… 4~6
第41回ワークショップ(6/17)特集	… 7
ネットワーク	… 8

関西ワークショップ（4／15）報告

ユースサービス大阪

（財）大阪府青少年活動財団

木内 功

「ボランティアについて考える」

今回のワークショップは、前回の防災教育と環境教育に引き続き、震災ボランティアについての実際的な取組と、アンケート調査を基に発表させていただきました。ここでは、アンケートについて述べさせていただきます。

まず、アンケートの対象は、大阪府立総合青少年野外活動センターに所属するキャンプカウンセラーと呼ばれる大学生達で、青少年の「人と人の交流」や「自然に親しむ」ためのキャンプを、ボランティア活動として支えている人達です。基本的に大学1・2年生から活動を始め、大学在籍中に3～4年間継続して活動できる人達であり、また、青少年の指導のため、年間を通じて理論や技術の研修もカリキュラムとして受けています。

《アンケート概要》 配付総数 180 回収数 100 (発表時4／14現在)
1年 31 2年 25 3年 34 4年 9 女性 59 未記入 1
未記入 1 男性 40

- 質問の概要
0. 対象者の地震の被害の有無
 1. 一般的な震災ボランティアについて
 2. 直接的な震災ボランティアについて
体験者の活動理由や内容
体験しなかった者の理由
 3. ボランティアに対しての意識や考え方の変化
 4. 震災を経験しての自然感や人生感・価値観の変化

《結果の概要》 ※数字は返送された100名での人数で複数回答でもののです

0. 対象者の被害の有無については、被害有りと答えたものは45名で、家の倒壊はなかったがライフラインが止まったものは25名あり、ガラスが割れたり家具が倒れ、家は19名あった。精神的なショックは、少しの物音にも過敏になった者も含めて、74名が有りと答え、恐怖による動揺が続いたと答えたものは16名であった。

その中で、救援活動として54名が義援金を提供し、36名が被災地で直接ボランティアをし、救援物資を送ったものが11名、献血をしたものが5名であった。全く何もしなかったと答えてきたものも1名いた。

1. 一般的な震災ボランティアについては、救援行為として当然(56人)人の和やつながりが大きい(54人)、若い人の活躍が嬉しい(40人)など肯定的だが、被災者の自立が遅れている(35人) 流行的になりすぎ(33人) というふうにも感じている。また、自分がボランティア活動をしているためか、ボランティア活動が社会に

与えた影響は大きい（38人）や、ボランティア活動が広まるのは嬉しい（23人）などの意見もある。社会的な意義は、助け合いの互助精神の芽生え（64人）があり精神面での救い（42人）や労働の手としての救い（39人）があったとして、かなりの評価をしているようだ。

2. 直接的なボランティアについては、活動したもの36人で、しなかったものは64人の返答で、その半数が学校のテスト期間のためと答えているが、きっかけをつかめなかったと答えたものも20名いた。ボランティアへのきっかけは、個人で飛び込んだものが9人で、友人やグループ・団体からの誘いが35人であった。内容的には、救援物資の管理や配付が多く焚き出しや子供の世話・夜の巡回などの仕事が多かったようだ。体験して良かったことは、被災者に感謝されたことや、多くの人と知り合えたことであり、苦しかったことは、肉体的なことが辛く、考えさせられたことは、被災者の自立・交流の難しさやボランティア組織の問題などである。
3. ボランティアに対しての意識の変化は、自分の所属しているカウンセラー活動へは23人が考え方が変わったとしており、ボランティアということに対しては41人が意識変化ありと答えている。また、ボランティア活動を続けるための事柄に対しては本人の意志（91人）・情報（64人）・最低限の経費補助（48人）・経済的余裕（44人）・休暇や暇（41人）・ボランティアグループの存在（34人）・行政のサポートや家族の理解（31人）と続いている。
4. 自然感・人生観・価値観については、変化したと答えたものが80人で、その要因は、被災地を直接見た（40人）・被災状況の報道を見て（30人）・人間の思い上がりを感じて（25人）地震の揺れそのもので（24人）・死者や被害者の数が多かった（23人）家族や知人の被災（21人）余震の恐怖（17人）震災ボランティアを体験して（14人）などへ続いている。また、変化として、自然感では人間の無力と自然の偉大さを感じ、人生観では、悔いのない人生や明日のことは分からないと感じ、価値観では、物質より内面・ライフラインが大切というふうなものを上げている。

以上が概要ですが、ボランティア活動の基盤には、(1)生活（家族や近隣）(2)地域（街やサークル・組織）(3)社会（文化や行政）のそれぞれのネットワークが重要と思います。また、活動としては、単純労働から技術・知識のいるものなど複雑であり、そのためには幅広いボランティアが必要であり、そしてそれをコーディネートや組織化するプロが今後はもっと求められると考えています。（私自身もボランティアに係わるプロであり、より一層の自覚が必要と思っています。）しかし、基本的には、「だれでも」「いつでも」「どこでも」の精神でボランティア活動は可能であり、そのためには、自分が活動しなくても、ボランティアを認める社会的認知・組織の認知・家族や友人としての認知が、それぞれの立場でも踏み出せることであり、それが活動を支える文化を創っていくことにつながると考えています。

自由集会「阪神大震災と環境教育」の報告

代表者 赤尾整志

関西支部は、1995年13・14日に千葉県立博物館で行われた日本環境教育学会第6回大会で「阪神大震災と環境教育」についての自由集会を行いました。集会は、多岐にわたるテーマを整理するため会場を三つに分け、それぞれ60分間の討論をしました。全体で150人余りの方々に参加していただき、熱心な議論が行われました。ここで、当日の主旨と内容、そして三つの分科会で行われたことの概要をレジュメから紹介し、当日の流れを報告します。

【主旨】 いま、地球物理学や地形学など自然科学や、建築・土木にかかわる都市工学・計画学、そして被災者の心身の健康と医療や行政の対応などの各分野では、大震災の現場で、これまでの理論や技術、文化のあり方について様々な検証が行われています。関西支部では、これらのことと環境教育の関わりについて研究してきましたが、この大会を機会に「阪神大震災から何を学ぶべきか」を、会員のみなさんと共有していきたいと思います。

【内容】 阪神大震災によって、私たちは限りなく多くの問題を目の当たりにしました。それはこの自由集会の時間の中だけではとうていすべてを尽くすことはできません。今回は大震災から約4カ月たった現在の時点で、環境教育と深い関わりのある緊急かつ重要と考えられる問題－防災教育、ボランティア活動、被災者の自立－にできるだけ内容を絞って話し合います。

<C会場>防災教育と環境教育（責任者 藤岡達也，林浩二）

地震に限らず、火山災害や気象災害、それに付随する地盤災害などの悲劇が今までも多く繰り返されている。これらに関する自然災害の科学的な知識を体系的に学ぶことが、まず防災教育の第一歩といえる。災害が起こった後の報道をみる限り、いつの場合でも決して知識が十分に市民権を与えられているとはいえない。

また、学校をはじめ、多くの場所で避難訓練・防災訓練が行われているといえども、それらは学校内に限られた訓練である。形式的な訓練をもう一度見直すとともに学校的位置する地域での災害の可能性や防災体制も考えていく必要がある。特に各地域における自然災害に関する危険性を学校で教えることも重要な防災教育であろう。身近な地域を考えることは環境教育にとって重要なことであつたが、防災教育も同じことであると考えられる。

本分科会の流れ

◎今回の震災の特色を科学面・社会面・技術面からスライドやOHPを用いて紹介した。同時に高校生（大阪府内）のアンケート調査結果で地震が起こったときの感想として「布団の中から起きあがることができなかった」「15年間で初めて死ぬのかという思いをした」「恐くて何もできなかった」という内容を報告した。

＜D会場＞ボランティア活動と環境教育（責任者 山本幹彦，木内功）

環境教育の目的は、地球市民としての共生感覚を基礎として、生態系の知識やそれとの関わり方の智慧を学び、民主的な社会の一員として、主体的な行動ができる市民を育てることにあると私は考えている。

新たにボランティア元年と呼ばれる今、被災者援助としてのボランティア活動の事例紹介をきっかけに、環境教育に取り組んでいる組織や個人のボランティアへの動機や、環境教育的視点から見た震災ボランティアに対する考え方について意見を交換し、これからの被災地でできること、さらに、これからの環境教育とボランティア活動のあり方について自由な発言を求めます。

本分科会の流れ

◎ユースサービス大阪におけるボランティア意識調査報告（木内）。東灘区東明公園、東灘小学校、子どもの遊びの広場、その他の報告（山本）をした。

＜F会場＞被災者の体験と環境教育（責任者 谷口文章，菊地泰博，天野雅夫）

この地震について、個人的な体験談と職業とは無関係に行った震災関連の実態調査等の内容を紹介し、極端に人工化、機械化した都市に象徴される現代社会が、どのように自然と関わっていたのか、生身の生活が一時的であるにしても戻ったのではないか、ということを考えてみたい。

高価な物品が天災で紛失、破損した場合、ある程度はやむを得ないとあきらめがつくが、人命におよぶ被災の経験は簡単には癒されないだろう。また、震災以後元気づけられたものは、「ガンバロウ」の連呼でなく、頑強に残った新築の高層ビルでもなく、それは、いつもの神戸の山、海等自然のやさしさであった。地震の巨大なエネルギーと大自然のやすらぎの景観から、自然がもつ畏敬なるものを感じずにいられなかった。環境に優しい（環境に負荷を与えないという意味ではなく、環境に合った、従ってという意味での）生活、知恵等、人間的な環境教育論を模索しながら、人と自然の共生の道を探っていきたい。

本分科会の流れ

◎直接地震を体験した被災者の体験談や避難所の生活についての報告をし、これからの神戸復興を環境教育的視点から考えていった。

学校教育ネットワークでは去年の神戸大会に続いてシンポジウムを開催しました。第2回の大阪大会から続いている集会で、今年で早くも5年目になりました。詳しい報告は本部ニュースレターに委ねますが、続けることだけでもたいへんな事だと思います。関西と関東のメンバーが連絡を取り合っているのも大変重要なことだと思います。

環境教育学会千葉大会のトピック

グローバル環境文化研究所 福島 古

はじめに入手したのは、原子栄一郎氏の報告でNGOフォーラムの原文「持続可能な社会とグローバルな責任のための環境教育」であった。これは、イントロダクションと「公正なそして持続可能な社会のための環境教育のいくつかの原則」、そして、「行動プラン」という項目から成り立っている。

結論的には、NGOs : UNESCO, UNEP, FAO等を縦横に結びつけた「新組織的なもの」の創造、運用、経営が必要とされていると言うことでしょうか。

つぎに注目したのは、「イギリスの環境教育・ナショナルカリキュラム：科学におけるクロスカリキュラム」の報告である。

イギリスのクロスカリキュラムでは各教科にまたがる5つの共通項目がある。

- ①環境教育、 ②健康教育、 ③経済と産業理解のための教育、
- ④生涯教育とガイダンス ⑤市民教育

つぎに、①～⑤までの項目の内、①を除く各項目の内容をキーワード的に列挙してみる。

②について

- ・物質の使用と悪用（アルコール、煙草、その他の薬品）
- ・性教育 ・ファミリーライフ教育 ・運動と健康 ・安全
- ・食物と栄養 ・個人の衛生と健康管理 ・環境的視野 ・心理的視野

③について —— STS教育的視点

- ・分配、供給、要求と消費者の意志決定に関する知識と理解
- ・経済問題・製材問題の分析、理解のための技術獲得
- ・経済活動での責任、権利と経済との関連性

④⑤について

- ・公共理解のための日常科学（天気、体調、自然現象、科学技術製品）
- ・STS的判断のための知識の獲得（食品添加物、CO₂の影響）
- ・文化としての科学（芸術の振興、古典的建造物の保護・保存）

この研究報告では、科学で獲得された技術を活用して「諸問題にに対処し、自ら行動するための市民教育、生涯教育」に繋げていく「人間の態度と行動を評価する」ことが出来るよう誘導して行くことの重要性が強調されていると思われる。

ネットワーク

◆ 府民の森のネイチャーイベント

子供冒険学校体験入学

〈日程〉 7月26日(水)～27日(木) 1泊2日

〈場所〉 交野市くろんど園地

〈対象〉 小学4・5・6年生30名

〈プログラム〉初めての仲間と過ごす自然のふしぎ体験キャンプ

〈参加費〉3,500円

キャンプDEスターウォッチング'95

〈日程〉 8月19日(土)～20日(日) 1泊2日

〈場所〉 千早赤阪村 ちはや園地

〈対象〉 小学生以上60名

〈プログラム〉天体望遠鏡で夜空を観察

〈参加費〉 3,500円

くろんどの森探検キャンプ

〈日程〉 9月9日(土)～10日(日) 1泊2日

〈場所〉 交野市くろんど園地

〈プログラム〉ナイトハイクなど夏の終わりの自然体験

〈参加費〉 3,500円

上記いずれも

〈申込締切〉往復はがきで7月1日(土)～10日(月)の間にお申込み下さい。応募者多数時は抽選とします

〈申込問合せ〉財大阪府緑化・環境協会
06-266-1038 〒541 大阪市中央区本町1-4-8 ひし富ビル2F

夏の自然観察……ネイチャーゲーム

〈日時〉 7月8日(土)9:30～12:00

上記いずれも

〈会場〉 府立青年の家

〈参加費〉100円(保険料)

〈申込方法〉2日前までに電話で申込して下さい。

〈申込問合せ〉府立青年の家075-961-3311
FAX075-961-3312 〒618 大阪府三島郡島本町桜井1-3-1(阪急水無瀬駅下車、山手へ徒歩6分、梅田からは阪急京都行急行で高槻市駅より普通電車で2つ目の駅約35分)

◆ メルヘンの里はてな?自然熟

〈日時〉 8月4日(金)～6日(日) 2泊3日

〈場所〉 メルヘンの里一岡山県真庭郡新庄村一20haのブナの自然林。里山に囲まれた自然いっぱいの新庄村はオオサンショウウオの生息地でもあります

〈内容〉 川遊び、山登り、虫とり、草花あそびなどなど。丸ごと自然体験、湯原温泉での露天風呂体験もあります。

〈対象〉 小学生以上と保護者。一般大人のみでも可。小学3年生以上は一人でも参加できます。

〈指導〉 財大阪自然環境保全協会理事増田茂氏

〈定員〉 45名。定員になり次第締切りますのでお早目に電話又はハガキでお申込み下さい。

〈参加費〉小・中学生25,000円大人29,000円

〈申込問合せ〉財大阪自然環境保全協会
06-374-3376 FAX 06-374-0608
〒351 大阪市北区豊崎2-4-5

ネットワーク

◆ 兵庫県立人と自然の博物館講座 身近な生き物を調べるユースセミナー

・昆虫と植物の採集のしかたや標本のつくり方を学びます(3回シリーズ)

〈日程〉 ・ 8月2日(休)/博物館の見学と観察会
・ 8月3日(休)/終日観察会
・ 8月4日(金)/観察会とまとめ感想文

各10:00~16:30

〈会場〉 博物館セミナー室・深田公園

〈対象〉 小学5・6年生(定員30名)

〈受講料〉2,000円

〈申込〉 ユースセミナー参加申込書に必要事項を記入し返信用封筒を同封のうえ申込んで下さい。

6月22日(休)から受付を開始し、先着順とします。

自然科学教室

土の観察

〈日時〉 7月22日(土)14:00~17:00

〈会場〉 博物館内セミナー室

〈講師〉 博物館生物資源研究部
研究員 小舘誓治氏

〈定員〉 40名

〈締切〉 開催日5日前、先着順

上記いずれも

〈申込問合せ〉兵庫県立人と自然の博物館

0795-59-2002 FAX 0795-59-2007

〒669-13 三田市弥生が丘6

関西 ECOMAIL

第26号 1995年 月 日発行

編集 日本環境教育学会関西支部世話人会

発行 日本環境教育学会関西支部

事務局 大阪教育大学 環境科学教育研究室(鈴木善次研究室) 気付

〒582 柏原市旭ヶ丘4丁目698-1 (☎0729-76-3211 [内線3127])

次回 第27号 1995年8月25日発行予定 原稿締め切り 8月10日

◆ 環境教育トレーナー養成セミナー

環境教育にとって、指導者の養成はたいへん重要なポイントです。その中でも、私たちをとりまく自然環境や環境

問題について、学習者自身がいろいろな共同作業を通して、それぞれの感じ方や価値観を認め合いながら、学習者が共に学び合う場を作ってゆける指導者が求められています。

今回は、体験的な学習を援助する具体的な方法について、アメリカの学校や社会教育の場でもっとも広く利用されている「木」をテーマとした総合学習のアプローチであるPLT(Project Learning Tree一木と学ぼう)の手法について学びます。

②PLT 一日体験ワークショップ

〈日時〉 7月23日(日)10:00~16:30

〈定員〉 40名(定員になり次第締切ります)

〈参加費〉5,000円(昼食、会場費、保険料等)

上記いずれも

〈場所〉 京都市宇多野ユースホテル

075-462-2288 〒616 京都市右京区太秦中山町29

〈講師〉 山本幹彦(京都YH協会、環境教育トレーナー)

〈後援〉 環境庁 日本環境教育学会 京都市 京都市教育委員会など

〈申込問合せ〉(財)京都ユース・ホテル協会環境教育事業部

075-462-9185 FAX 075-462-2289

〒616 京都市右京区太秦中山町29